

今回の院長メッセージは、特集「学習院と文学」にちなみ、若き日の波多野院長と作家・三島由紀夫とのエピソードをご紹介します。

作家の塩野七生氏が進学校の日比谷高校から学習院大学に入って、学習院の勉強のやり方や単位の選び方が自由なのに驚いた、と言っていた。彼女はその自由を活用して優秀な先生の下でギリシャ・ローマの研究に専念したので今の塩野七生がある。学習院には自分の希望に沿って自由に勉強して才能を伸ばした有名人が総理大臣、音楽家、小説家等々数多い。その一人が三島由紀夫である。

彼は学習院では私の7年上級だが俳句をやっていた兄（波多野爽波）と親友で、また三島の弟が外務省で私の遊び仲間だったこともあり、昭和32年だったと思うが米国・ワシントンの大使館勤務の私を訪ねてくれた。そしてミュージカルの「南太平洋」を観たいから案内しろ、という。私が「あれはもうニューヨークの公演も終わっちゃいましたよ」というと「まだどこかの町でやってるはずだ」と頑張る。調べてみると車で4時間ほどの町でやっていて、主演女優もお望みのミッチ・ゲイナーである。私が「案内するには大使館を2日休まなきゃならない」と渋ると、三島は「僕も大蔵省の役人をやっていたが君みたいな下っ端が2日くらい休んだって大使館はぜんぜん困らない」という。やむを得ず2日間ズル休みして車で案内したがたいへんど満悦だった。

ドライブの車中では日本の将来を憂い、また学習院の将来を憂っていたのが記憶に残る。学習院についていえば戦後初代の安倍能成院長作詞の学習院院歌が気に食わないというのである。その出だしが、敗戦と共に古い学習院は死んだが不死鳥の如く新学習院が生まれた、というのであるが、三島は「古い学習院は死んでいない。100年以上にも及ぶ歴史と伝統ある学習院、『気品とおおらかさ』ある校風を護っていかねばならない」と繰り返していた。私は将来学習院長になる、なんて夢にも考えていなかったのだから適当に話を合わせていたが、今になって学習院院歌を歌っては三島の言葉を思い出す。

三島由紀夫と私



学習院長 **はたのよしお**
波多野 敬雄

プロフィール

1932年生まれ。学習院高等科卒業（幼稚園から高等科まで在籍）。1953年東京大学法学部中途退学・外務省入省。1956年プリンストン大学卒業。在米国 特命全権公使、大臣官房外務報道官兼昭和天皇御進講役等を経て1990年に国際連合日本政府代表部 特命全権大使となる。2003年学習院女子大学長に就任。2006年6月に学習院の院長・理事長に就任。

この内容は、『読売新聞』平成22年11月25日（木）朝刊にも掲載されました。